

吉藏の法華經解釋について

里見泰穩

吉藏が法華經を解釋するために、依用したのは、吉藏自らの言ふところによれば、(一)關河叙朗の舊宗、(二)龍樹、提婆、(三)法華論、である。

法華論疏卷上（正藏四〇、七八、五）の次の文が此の事を示してある。

餘講三斯經文疏三種一用關河叙朗舊宗二依龍樹提婆三通經大意三探此論綱領以釋法華但昔三出經疏猶未解論文今具釋之

關河の叙朗とは關中の僧叙と河西の道朗であるが、法華經玄論二二二（續藏）には

評日叙公親承羅什製斯序者即明常其明證蓋是法華宗本不得依之矣

と僧叙について述べ、親しく法華の譯者羅什について承け法華序を製した僧叙であるから、その説に従はざるを得ないと論じ、續いて、次河西道朗對翻涅槃其人亦者（著？）法華統略明說法華經凡有五意……略……評日道朗著涅槃疏世盛行之所解法華理非謬說明常之旨還符叙公也

と述べ道朗は、涅槃疏を著したほどの人であり又法華の疏を著しておりその解する所謬説に非ずと述べ、更に道場の慧觀・劉虵・道

生の説をあげて援用してある。これは法華經に常住を明することを主張し、法華經は尙無常の經であるとする説を反駁する爲である。この反駁のために三證をあげるのであるが、その一證としては、(一)法華前の經により、二證としては、(二)法華の文により、それぞれ「法華に常を明す」ことを論證し、續いて第三證として、(三)關河の舊説を引いて法華常の義を説くのである。これによつて吉藏が如何に關河の舊宗を一つの權威としてこれを援用しているかを見得る。而も此の三證の次には續いて、法華無常説の光宅法雲を出して、「光宅の此の言、文意を識らずと鋭い批判をあびせてあるのを見ると、吉藏は光宅法雲を始め開善智藏・莊嚴僧旻等、所謂梁の三大法師等江南佛教の學風一世を風靡せるに對抗せんとしたことを伺ふに足ると思ふ。吉藏は法華玄論卷一に、これ等三大法師に言及して

爰至梁始三大法師頌學當時名高二代大集數論遍釋衆經但開善以涅槃騰譽莊嚴以十地勝鬘擅名光宅法華當時獨步法華玄論卷一——〇〇（續藏）

と述べてある。法華に於て當時獨歩と言はれる法雲については更に年至三十一於妙音寺開法華淨名二經題機辨縱橫道俗歎伏由之已來法華譽顯餘流通三萬川疏記零落 法華玄論卷一——〇〇（續藏）

と述べてある。光宅法雲の法華が如何に世を風靡したかが知られるのである。これ等の法雲・智藏・僧旻等三大法師を中心とする江南佛教に對抗することから、關河の舊宗に權威を認めて、之を援用したと思はれる。先に觸れた、僧叙、道朗の外、慧觀については、作序竟示羅什羅什歎日善男子自不深入經藏不能作如此說也 法華玄論二——〇〇（續藏）

と述べ法華の讀經者羅什によつて絶賛されたことを擧げ吉藏はその權威を證するものとしてゐる。更に劉虬については、

答注法華經探江左安林壹遠河右什肇融恒八師要說「法華遊意卷上
—236—(續藏)

と言ひ、更に法華玄論卷一にも

次乎齊代有清信優婆塞劉虬與三十許名僧依傍安林壹遠之例
什肇融恒之流撰錄衆師之長稱爲注法華也

と注法華の成立を説明し、安・林・壹・遠・什・肇・融・恒等八師等の長を撰録したものとして權威あるものとして評價してゐる。又江南佛教を批判する武器として、法華論をあげてゐるが法華論を見て「餘此の文を見て悲喜交々至れり」と感慨を漏らすほどであつた。龍樹・提婆に依つて經の大意を通じたことは、「余少くして四論を弘め」といふ三論の大成者吉藏として當然のことであらう。

江南佛教に對する對抗意識は、吉藏に甚だ強いようである。「光宅の此の言文意を識らず」と痛論したことは先に觸れたが更に十三家を列ねてその宗旨を評論した中で、僧叡を衆師に冠絶すと稱揚し、更に光宅の一門と數條視異なりと比較してゐるなども、吉藏の光宅に對する態度を示す例である。江南佛教に對立し、従つて法華經解釋の上で、法雲が常に吉藏の意識にあつたのは當然であらう。吉藏の法華諸疏の中に、屢々光宅の名をあげて批判し、或は有人の説として光宅の説を取り上げてゐるのを數えあげれば、おびたゞしい數にのぼる。

又吉藏は光宅の學問の系譜を述べて

評日光宅受經於印印稟承於龍龍爲法華之匠然此釋以文義
兩推實符會經致法華玄論卷一 215(續藏)

吉藏の法華經解釋について(里見)

と云い又

光宅法師受學印公之經而不用印公之釋法華玄論卷一 215
(續藏)

と述べてゐる、慧龍・僧印・光宅と相承したことを述べながら慧龍の説(宗旨についての論)を經致に符會するとして一應肯定しながら「義亦未允也」と批判し、境智を以つて宗と爲す僧印についても「於觀亦盡美矣」と批判してゐる。光宅が一乘の因果を以つて經の宗旨となすについても「今以文義推尋意猶未允」と評破し、慧龍は佛慧(果)を以つて宗となし、僧印は龍の説に境を加えて境智を以つて宗となし、光宅は印公の釋を用ひず一乘の因果を以つて宗としたと述べて、それぞれ前述の如く評したのである。吉藏が關河の舊說に對する態度と併せ考えて興味がある。前述の如く光宅に對する吉藏の批判は、激しいものがあるが、一方亦吉藏が光宅の法華解釋に負ふてゐると思われる點も少くない。今一々、例を擧げられない程である。法雲、智顛・吉藏とそれに慈恩の法華に關する注疏の關係は深く又複雑であるが、攻究を要することである。吉藏の法華に關する疏の中で、智顛の名が見えるのは法華義疏卷二335(續藏)に「顛禪師云」として引かれたものが唯一回だと思われる。吉藏が智顛を批評することは殆んどなく、寧ろ吉藏が天臺の典籍で灌頂の批判の對象となつてゐる。